

Title	ピエール・ジュールド『闘牛士を剥製にする』：まえがき 序論 第一章 ：ちぐはぐさとおかしみ (翻訳)
Sub Title	Pierre Jourde, Empailler le toréador : avant-propos, prologue, chap. I ：incongru et comique (traduction)
Author	佐野, 有沙(Sano, Arisa)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.75 (2022. 10) ,p.205- 229
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20221031-0205">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20221031-0205</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ピエール・ジュルド『闘牛士を剝製にする』

——まえがき 序論 第一章：ちぐはぐさとおかしみ  
(翻訳\*) ——

佐野有沙

闘牛士を剝製にすることさえできていたら、  
こんなことはぜんぶ起こらなかったのに  
ピエール・カミ

象は伝染する  
バンジャマン・ペレ

---

\* 本稿は、Pierre Jourde, *Empailler le toréador : L'incongru dans la littérature française de Charles Nodier à Eric Chevillard*, José Corti, « Les Essais », 1999, pp. 7-34. の翻訳である。著者のピエール・ジュルド (1955-) は、フランス・クレテイユ出身の作家、文芸批評家。原書の主題である « incongru » (またその名詞形 *incongruité*) を、ここでは「ちぐはぐな」「ちぐはぐさ」と訳したが、その意味するところは「状況の要求や、処世術のルールに合致しないもの」(ラルース辞典)であり、文脈によっては「不適切な」「場違いな」「ぶしつけな」「無作法な」「非常識な」といった訳語も可能だろう (詳しい語義は、「ちぐはぐさと礼儀作法」の項を参照)。学究的用途であることを条件に、第二章までの翻訳掲載を快諾してくれた版元ジョゼ・コルティ社のベルトラン・フィオドー氏、翻訳権に関してアドバイスをくれたフランス著作権事務所代表のミリアン・ダルトア氏、そして原文に関する疑問点にきめ細かく答えてくれた慶應義塾大学文学部のヴァンサン・ブランクール氏に、深く感謝申し上げます。© Librairie José Corti, 1999.

## まえがき

本書の野心は、どんな時代にも、どんな国にも、どんな芸術についても当てはめることのできる独断的なちぐはぐさの定義をもたらすことではなく、あくまでそれを用いて個々の形態の描写が可能となるような、文学的、修辭的、論理的、また哲学的ちぐはぐさの、ある概念を提案することにある。ここで範囲を限定したそれぞれのカテゴリーを、ぜひ遊びであると同時に、真剣な練習ととらえてほしい。遊びは、ルールを話しあいたいと思わせるまでに参加者の興味をひけば、機能することだろう。

この遊戯性は、重箱の隅をつつくような分類法とまったく相容れないかという、そうではない。ちぐはぐさにはさまざまな個体がある。それはほんの些細な違いによって種や亜種に整然とふり分けることで得られる、意味のない得意満面をもたらす喜びと無関係ではないのだ。本書の狙いにそって言えば、これはもっともとるに足らない昆虫に、保管するにふさわしい引き出しを与えようと試みるものである。むやみたらなカテゴリー化にたえず注意を払ったことで、本論では、現代存在論に革新をもたらしたいいくつかの法則——「フランケンシュタイン効果」、「象の原理」、「ペダロの定理」——を定式化し、「ムール・ア・ゴフル」といった希少種の風習を描写し、また今日まで観察の目を逃れてきた化け物——「逃げ出すキュウリ」、「ぜんまい仕掛けのペリカン」、「<sup>セファロフォン</sup>頭電話」——の存在を明るみにすることができた。文学史は動揺をまぬかれないだろうし、もしジャン＝ポール・サルトルがマロニエよりもバラモンジンを好んでいたら、彼はアレクサンドル・ヴィアラット〔20世紀フランスの作家、文芸評論家〕になっていたことがわかるだろう。

ちぐはぐさの最大の法則のひとつが、「あるものがそれ自体であればあるほど、それはそれとは別のものである」と言いあらわせることを知っていれば、この分類法の不可欠であると同時に不条理な性格が理解できるかと思う。腑に落ちないが、省略することもできないのだ。

いっぽうで、本書にとりかかる当初から抜きがたい確信としてあったのは、ちぐはぐさが存在するという、またそれがおかしみのジャンルに属する

生き物のなかでも独特な、つまりよく知られていない種であるということだ。とはいえそれは、いつも可笑しいわけではなく、たいてい言語を消費するが、言語なしでもやっていけたりする。少しでもわたしの確信、またその観察がもたらすまっとうとはいええない喜び——たとえば旧国立図書館の勤勉な静寂のなかでふきだす衝動をこらえられないような——を伝えるためにも、この動物を適切に捕獲できていることを願う。そして読者が、わたしを「ほかの批評家のためにしか書かない批評家」というカテゴリーに分類するといった考えを抱かないためにも、この込み入った問題を、各人がそれぞれ喜びを見いだせるくらいシンプルに解明できたことを願っている。この仕事を終えてなお、ちぐはぐさの側からある抵抗感を感じている。その魅力のひとつといってもいい、矛盾した抵抗感である。ちぐはぐさは、それを望む者に際限なくみずからをさし出すと同時に、理解できない証拠を投げつけてくる。これはちぐはぐな作家たちのなかに、ピエール・ダックのような有名人から、エリック・シュヴィヤール〔存命のフランス人作家〕のような非常に目立たない人物までいることの説明となるだろう。

本書で扱ったテキストの大半は、19世紀から20世紀にかけてのフランスのものだが、おもな例外として、ロバート・ベンチリー〔20世紀アメリカのユモリスト、俳優〕、ルイス・キャロル、エドワード・リア、ウッディ・アレンといった一連のアングロ・サクソン人がいる。バンド・デシネ、造形芸術、映画にも、若干の言及を試みた。選択が限られている理由はいくつかあるが、著者自身の知識に限界があることも少なからぬ理由だ。とはいえ、ある種の風変わりさが19世紀に誕生、あるいは再誕したことはたしかで、それはとりわけフランスでは19世紀末、ロートレアモンとアルフォンス・アレーのあいだで起こった。そしていくつかの作品は今日もなお、目立たないが着実に、ある種の風変わりさをうみだし続けている。本書でわたしは、理論化と分類化と、それから選集化という作業を、同時にやりたかった。一番目に関しては反論がありそうで、二番目には議論の余地があり、三番目は不十分だったのではないかと案じている。本書の調査では避けがたかった不足部分については、せめてこれを読んだほかの人々のうちに、それを補いたいと

いう思いをかきたてることを願うばかりである。

## 序論

1893年1月7日、『ル・シャ・ノワール』に掲載されたガブリエル・ド・ロートレック（画家ロートレックのいとこ）のテキストを例にとってみよう。のちにロドルフ・サリスが創刊した同時代の週刊誌『シャ・ノワールの馬鹿話』（1894）、そして一世紀あとの『シャ・ノワールの詩人たち』（1996）というふたつのアンソロジーに再掲されたものである。

象があらゆる家畜のなかで、もっとも体積が大きいことには疑いがない。その名の由来もそこからきている。

じっさい象が、温かい河のほとりで生育し、退廃した黒人たちがかれらに神がかった敬意を捧げていることはよく知られている。象は、兵士、子守り女、そのほか食べられる物に対して、つよい共感を抱いている。

かれらのうちの多くが、遠方に連れていかれると、望郷の念から毛髪麻痺を起こし、突然死することが確認されてきた。この場合の最良の治療法とは、象の皮膚をはぎ、ワニ皮の小銭入れや名刺入れなど、こまごました品物を作ることだ。

パリの市街では、象に遭遇することはめったにない。同様に霧深い11月の夜、激しい絶望の末に、<sup>ボンデザール</sup>芸術橋の高みからセヌ川に身を投げ入れ、新聞の三面記事を飾るような象を目にすることもほとんどない。

さらにはこの尊敬すべき動物の一頭が、死に際して朋友に、自分は責任ある親族を残さずに11日前に死んだと、遺言を託した仕立屋に答えるようことづけるのを見かけるのもきわめてまれである。

象はじつに献身的な動物でもある。パリ攻囲戦〔1870–1871年：普仏戦争におけるドイツによる包囲戦〕の際、気球の操舵のためにアクリマタシオン庭園〔1860年ナポレオン3世によって建設された庭園〕の象を使った試みは、徒労に終わったものの、忘れがたいものとして人々の記憶に残っている。

象は閉じこめられた状態では繁殖行為をしない。幾世代にもわたって、かれらがきわめて禁欲的な独身生活を折り目ただしく送るのが観察されてきた。

象は穏やかでおとなしい習性をもっている——その証拠に「象のように穏やかでおとなしい」ということがいつも言われるだろう。ところが「象」は、まさしく穏やかでおとなしい習性をもつ動物なのだ<sup>1)</sup>。

このテキストを定まったジャンルに分類しなければならないとすれば、一瞬ためらったのち、おそらくこれは科学的記述法のパロディ、ふざけた動物学の論文であるとするだろう。ひょうきんなビュフォン〔18世紀フランスの博物学者〕といったところか。象は、動物喜劇の伝統的手法である擬人化をほどこされ、あるいは逆に、物体あるいは物質の一種とみなされている（モノ化もまた動物喜劇の常套手段である）。科学的記述法のパロディという点では、論理という科学の道具がみごとに逆用されていることも挙げられる。論証のツールだったはずのものが、いまや根拠のない結果（「その名の由来もそこからきている」）、矛盾（「幾世代にもわたって、かれらがきわめて禁欲的な独身生活を折り目ただしく送るのが観察されてきた」）、また最終段落のような同語反復を生みだすばかりだ。しかしながら、ときおり現れる正確な描写を前に、わたしたちはただ困惑するしかない。なぜ故郷を離れた象が「毛髪麻痺」で死ぬのか。なぜ象は「兵士、子守り女」に対してつよい共感を抱くのか。なぜこの二つが「そのほか食べられる物」と同等に置かれる必要があるのか。この「なぜ」という疑問は、ここではこうした記述がなにに依拠しているのか、つまりこの感じのいい厚皮動物の心理的・生理的特徴の正否ではなく、記述の必要性それ自体にかかっている。ちぐはぐなものひとつの表現形式は、この疑問をかき立てるかで見分けられるかもしれない。エドワード・リアの物語に出てくるある作中人物は、一言一句のたびに、そ

1) Gabriel de Lautrec, « L'éléphant », *Les Gaietés du Chat Noir*, préface de Jules Lemaître, Ollendorff, 1894. ; *Les Poètes du Chat Noir*, présentation et choix d'André Velter, Gallimard, « Poésie », 1996.

んなことをするまでもないものに対して、同様の疑問を発する。かれはリアの全作品について、この疑問を発することができるだろう<sup>2)</sup>。

この問いは、テキストの語調が科学的記述に特徴的な、学者ぶった断定的なものであるだけに、いっそうはっきりしてくる。要するに、一般的なパロディとロートレックのテキストの違いは、後者がわたしたちにきわめて具体的な主題——動物の生活、触れることのできる事物の現実、確実な知識（象よりも具体的で地に足のついたものがほかにあるだろうか？）——を語りかける一方で、この主題が、空虚な記述のなかで否定的なものとしてしか現れないということだ。緩叙法（<sup>リトット</sup>「めったに遭遇しない」「きわめてまれである」）が喚起するのは、ほかの象がしない活動にせせせと励むまほろしの象のすがたであるが、それはいずれにしても、象本来の仕事とは一切関係ない。ではなぜそれを言うのか。なぜ精肉店の主人ではなく子守り女である必要があるのか。事物の重さと結びついた空虚で不必要なことは、行く手をふさぐ、具現化した、重みをもった首尾一貫性のなさが、いっけん理路整然とした記述に突如現れる。リアリズムの描写と不可能な論理がたがいに綱引き状態にあり、全体として「でたらめ」の効果を生みだしている。すべての象がここでは「余分」であり、テキスト自体の渋滞すら示している。しかしながらこうしたテーマ化は、あくまでおまけのものとしてわたしたちに与えられる。それはただ、言語に対する重み、読者をまごつかせる正確さの過剰、ここでひとまずちぐはぐさの名で呼ぶものを、ますます際立たせるだけなのである。

## 第一章 ちぐはぐさとおかしみ

### 誘因

パロディ、カリカチュア、ブラックユーモア、ナンセンスは、ときに非常に緻密な定義や分析の対象となってきた。ちぐはぐさは、おかしみの別種として存在するのだろうか。あるいはおかしみの一形態ですらあるのだろうか。それは知識の対象となるものだろうか、それともたんなる単語だろうか。研

2) Edward Lear, « Le baron perche », *Nonsense*, éd. Patrick Hersant, Ombres, 1997.

究対象の正当性が確立されていないとき、必ずつきまとうのがこうした難題だ。わたしたちは一体なにについて話しているのか、正確なところわからない。というよりもこの「なに」が、既存の知識の整理棚のなかでどの位置を占めているのか、前もっては知らない。とはいえクリティシズムの領域では、わたしたちはものごとを、すでにそれらを定義できるようなことばから知るわけではない。みんな、最初の直観にもっともふさわしい名称を与えようと努めるのだ。

「incongru ちぐはぐな」ということばは、今日ではあらゆる種類のおかしみの効果——意義はあまりはっきりしないが、一般的に驚きや意外性と関係がある——を示すのにもっともよく使われる。ジャン＝マルク・ドゥファイは、その著書『おかしみ』（1996）で、「incongru」を「隔たり」の意味で用いている。『残酷物語』から『パリュード』、『黄色い恋』から『ユビュ王』、『マルドロールの歌』から『緑のろうそく』まで、ちぐはぐさは君臨している」とは、『現代的な笑いの黎明期に<sup>3)</sup>』でのダニエル・グロジュノウスキの言だ。同じくグロジュノウスキによれば、『緑のろうそく』のユーモアは、バーレスク的なものと不条理の理論という二つのプロセスから生じているという。それは『マルドロールの歌』の、手術台の上の蝙蝠傘とミシンの名高い出会いのように、断絶、あるいは異物の結びつきから生まれるものである。しかし、一般的におかしみが断絶の効果と定義される以上、ちぐはぐさをそこから切り離すのは容易ではない。

おかしみの非常に特殊な一形態を指していたユーモアは、けっきょくはかなり全般的な意義をもつに至った。同様に、ナンセンスの名——厳密な定義化のプロセスを経たものだけにつけるべきかと思われるが——のもとに、ロベール・ベナイユンは多種多様な素材を整理している。そこにはピエール・ダックの有名な文言もふくまれる。「わたしたちは冬になるとよく、『ドアを閉めてください、外は寒いから!』と言う。しかし、ドアが閉まったとて、外はあいかかわらず寒いままだ」。こうした良識たっぷりのフレーズがあるか

3) Daniel Grojnowski, *Aux commencements du rire moderne, l'esprit fumiste*, José Corti, 1997, p. 65.



と思えば、サティのつぎのようなアドバイスもある。「あらかじめ空気を煮沸させたあとでなければ、呼吸してはなりません」。サティが勧めるのはたしかに実行がかなり難しい動作ではあるが、意味そのものはいっさいとり去られていない。

おかしみという広大な領土の境界を定め、区画化する用語は、こうした拡大の定めにあると言っていい。このような状況では、明確に定められた境界線上に、新たな地方をつくるなどという試みは、失敗に終わるのが目に見えるかもしれない。しかしちぐはぐさを定義し、その異なる種類をできる限り厳密に分類することは、あとでかえってより散漫になってしまったとしても、おかしみの仕組み、ひいてはその限界についての思考を、豊かにできるのではないか。

ここでしたいのは、凡百とあるおかしみの定理の最新説をうちたてることではない。ごく簡単におかしみは、その本質ではなく手段において、意味の経済に応じて機能することを指摘しておこう。文学において、パロディ、戯作、バーレスクといった「あべこべの世界」による伝統的なおかしみの方式では、継続性が求められる。風刺の一貫性、あべこべの世界における反復の効果の一定性は、対象となる世界やテキストの秩序の一貫性へと、わたしたちを仕向ける図式を描く。こうした方式の経済においては、すべてが関連しあい、すべてが、依拠するものの信頼された価値によって保証されている。

おかしみがなんらかのテキスト（「イベルテキスト」とジュネットなら言うだろう）、ジャンル、システムを対象としないときでも、一貫性は生じないわけではない。おかしみの効果というのは、一貫性の過剰に端を発すると言うこともできるだろう。論理の過剰というおかしみが存在すると主張することは、いまやありきたりになってしまった。おかしみの効果が、とりわけ演劇や映画において、非常に正確なリズム、完璧に調整されたモーターによって生じていると主張することもまた同様である。ベルクソンの笑いの理論は、主体のモノ化、生命の機械化による笑いを誕生させた。主体は、自動的に動き、かれを完璧な主体にならしめている自由というものの通常予期できない性格とは相反するシステムに、囚われの身となって現れる。大げさな

表現、<sup>イベルボル</sup>誇張法、カリカチュア、性格喜劇に関するあらゆるおかしみの効果、また機械的につみかさねられたそれらの表現との取り違ひは、こうした理論範疇に含まれる。ここに固定観念のおかしみ、紋切り型の活用と呼ばれるものをつけ加えていだろう。また笑劇のおかしみ、性的・糞尿的な冗談も、それらがつねに主体を生体の機能へと、自身のからだにおける意識や自由の反対物へと送りかえしていると見なすと、この機械化・モノ化によって定義される全体のなかにすんなりと加わってくる。

<sup>コントロールベトリ</sup>語音転換やことば遊びがもたらすおかしみにも、一般にこの記号表現の機械化があてはまる。わたしたちは、物質への隷属から解放してくれるはずの言語のなかで、主体の肥大化を見てとり（どもる人物の尽きることのないおかしみの効能はここから生じる）、さらにことばによって受けた変化を見積もって、笑う。もっとも無害なテキストが、音の響きの避けがたい重みや偽の音節の言いなりになったかのように現れ、そこから別のテキスト、別の意味が生じてくる。この出現を決定づけるものが（一見すると無害な文章のなかで、語音転換の存在をにおわせ、そしてもちろん誰もが気づいていなかった解答をもたらしつつ）、テキストの潜在能力を現前させ、いわば、別のことも言う定めにあった運命を実行する。

問題なのは、どれぞれのおかしみの定理の有効性を主張することでも、分類表を作りあげることでもない。ユーモアに関して満足のいく分類がほぼ見当たらないこともあり、ここでは既知種（「ことばのおかしみ」、修辞技法（語音転換）、ジュネットの用語でいうところの「第二次の」文学ジャンル（戯作）を、同時に見ていくことになる。こうした順不同の検討が主として狙いとするのは、おかしみの形態や手法がほとんどいつも示す特徴的な性格、誘因からなるといっていいその性格を、強調することにある。機械化が示すのは、なんらかの法則、なんらかの重みへの服従だ。笑いは、内的必然性の表出と関連している。

パロディのような第二次の滑稽ジャンルは、それがおもしろくあるために原文の形跡や記憶を必要とする場合、やはり目的論的といえるやり方で笑いを生みだす。おかしみはいわば、非・おかしみの目的として現れ、そこで変

貌を実現する。わたしたちは笑いやおかしみの効果を、みずからのうちで盛りたて、その一触即発の効能を見いだすが、そこで笑いの効能がくみつくされるのは、わたしたちが無害なテキスト（もしくはそうと見えていた現実）を記憶に呼びさまし、滑稽な変形のなかでそれが一体なになるのか、それがいかに今はなり得ないもののように見えているかを、見積もるからなのだ。

おかしみが意味をかく乱するとき、意味はかえってより確かな、限定されたものとなる。威厳ある弁士が、つまずいて演壇から落ちる。弁士の精神性をあらかず威厳と、かれを肉体的なものへと引きもどす転落がかみ合い、ある種の交換の経済のなかでたがいがたがいを表明してさえいる。威厳という前提がなければ転落のおかしみはないし、威厳は転落の側から意味の余剰を受けとり、その余剰は威厳が崩壊していくなかで使いつくされる。

このおかしみにおける誘因というのは、手段を節制された経済にしたがひ展開するが、その極端なケースがしいられた変形、とりわけ語音転換に見いだせる。これが機能するためには、現象にいかなる過多も過少もあってはならない。語音転換の例を、おかしみにおいては原則としてなんら余分はなく、各要素が平等な関係にくみ込まれているということの完璧な例として見なす必要がある。取り違いはどこまでも発展していく可能性があるが、この発展の各ポイントは、ある正確な必然性にしたがっている。くりかえしのおかしみと呼ばれるものについても、通常考えられることとは反対に、少なくともそれが機能するときは、過剰なものはなにひとつない。同じ文言の機械的なくりかえしは、おのおの同様の力で、その文言を生みだす必然性をあらわしている。

おかしみの厳密な法則が、ゆるむように見える場合もしばしばある。「およそのもの」もまた笑いを生みだし、失敗した、もしくはだいたいの語音転換、これみよがしにしくじったことば遊び（« Comment allez-vous-yau de poêle ? » [« Comment vas-tu ? 調子はどう ? » と « tuyau de poêle 暖炉の煙突 » のダジャレである « Comment vas-tu yau de poêle ? » を、さらに主語を tu から vous に変えひねったもの]) も同様である。それらは笑わせる（か、とにかく笑わせようとはする）。なぜならそうしたしくじりは、意味解釈に

かかわることばの機械的なものを、じつのところ強化しているにほかならないからだ。エンジンの不調は、調子がいいときのエンジンの存在を前提とする。不調なエンジンはまるでみずからのためにように動きつづけ、ついには意味の必然性や、統辞法の秩序や、語の形態よりも強力なものとなって現れる。強制されたあるいはわざと失敗したことば遊びは、そこで身動きがとれなくなっているのがもはや行動や、運動や、性格や、言語でなく、滑稽への意志である限り、滑稽に見えるのだ。この件に関して達人であるボビー・ラボワントは、こうまで言っている。「笑いを起こすのは、まずいダジャレだ<sup>4)</sup>」。

### 無根拠さ

しかし機械的なものにおける失敗というのは、機械的なものを含んでいるとはいえ、ちぐはぐさと呼ぶもの、とりわけその近似物に、わたしたちを近づける。なぜならそれは根拠がないように思えるからだ。ペレックが「彼女はどこの郵便獄プロード・ポストにもスパイを放っているという噂だった〔郵便局のもじり〕<sup>5)</sup>」あるいは「ぼくらは関東直入ア・フリユル・トゥルコアンにたずねた〔単刀直入ア・フリユル・フルボワンにのもじり〕<sup>6)</sup>」と書くとき、文脈にことば遊びを正当化するものはなにもない。それは面白いわけではないが、そこにこそ存在理由を見だしている。まさに幾何学的な意味での非合同性、わずかな不完全性であり、ふたつの意味がひとつのかたちのなかでかさなり合うことを妨げる。アレクサンドル・ブレフォールの創作が、かっこうの例だろう。「男が飼う犬のバセットバッセに身をかがめる〔男が自分の過去バッセをふりかえる〕のもじり」、きみの体はタトゥータトゥー入り〔き

4) Bobby Lapointe, « Avant-propos au lecteur », p. 7, *Intégrale des enregistrements*.

5) Georges Perec, *Mais quel petit vélo à guidon chromé au fond de la cour ?* [1966], Denoël, « Folio », 1982, p. 31 [弓削三男訳「営庭の奥にあるクロムめっきのハンドルの小さなバイクって何?」『物の時代 小さなバイク』所収、文遊社、2013年、205頁]。

6) *Ibid.*, p. 66 [同書232頁を参照しつつ、ことば遊びがわかりやすいよう改訂した]。

みの体はきみのもの」のもじり]、神は怠惰をつくった〔「神は女をつくった」のもじり〕。伝統的なおかしみの考え方では、こうした命題のおもしろさは、ももとのテキストの歪曲、あるいは異なるふたつの意味のかさね合わせによるものだ解釈されるだろう。おそらくそうだ。しかし、ちぐはぐさのおかしみというのは、この当初のおかしみを麻痺させに、そこにおまけのものとしてやってきて、ひそかに、その若干の過剰さにおいて、かさなり合いが完璧になろうとするのを妨げる。ちぐはぐさはつねに、なんらかの余剰と結びついているのだ。

語音転換でさえ、ちぐはぐさの副作用を生じさせる。そのおもしろさは、たいがいきわどい文言をかくし持つ意味の二重化や、音節入れかえの制約のみからくるのではない。語音転換であると明示されていない場合でも、わたしたちは文章の奇妙な風体、とりわけ、必要性を欠いた奇妙に明確なものから、その存在を疑う。細部の無根拠さが、語音転換の消費体系のなかでそれを消化するようながす。であるからその笑いには、最後になって明らかとなる性的なものの騒々しい消費だけでなく、出発点となる文章でのひそかな抵抗感が関係してくる。隠された意味ではなく、これみよがしの無意味さである。

奇妙であるという印象、場違いであるという感情を、バーレスク的な物語のはしばしから感じとることはできるが、体系的な効果が、すぐにわたしたちを通常の状態に連れもどしてしまう。いっぽうでちぐはぐさは、さしあたっては慣習的な枠組みでも発展しうるものである。ペレックの『小さなバイク』は、ひとまず英雄滑稽譚として読める。英雄的なものとはかけ離れたどうでもいい行為の数々が、「美しい詩句であやどられた散文叙事詩の物語」のなかで伝えられる。しかし本文では、エピグラフの約束はいささかも守られない。たび重なることばのあや（巻末の表参照、ただしいかにも怪しい）から、すぐにパロディであることは見え見えだが、それらのあやをどう受けとったらいいのかも、それらがなにかを狙いとしているのかも、はっきりとはわからない。

ちぐはぐさは、パロディやカリカチュアの土壌でいかになく発展しうるが、

その際、読んでいるものの身分や意図について読者を戸惑わせるほどに、それらの効果をゆがめている。それはおそらく、ジッドが『パリュード』を「なんらかの風刺」と予告したとき意味しようとしていたことと、ある部分では重なるだろう（なおペレックはなんらかのパロディでジッドを模作する<sup>7)</sup>）。非連続性と、あらゆるジャンル、語調、さらには言語のたえざる混濁が、読者にひとつの正確な修辞体系を選ばせることを妨げる。ペレックの物語では「でたらめ」がどんなときでも、無駄なくりかえしを背景に顔をだす（モーターバイクに乗ったボラックの行ったり来たり。ちょうどジッドの「阿呆劇」における、友人たちの絶え間ない出入りのようなもの）。かくして例のカラコルムが、アルジェリア行きを拒否し、友人たちの悪意に対抗しようとする際、かれはそれを擬似中世語で行う。英雄滑稽譚という枠組みにおいては理にかなったように見えるが、これはしかしすぐに別の言語となり、別の訛りが変幻自在に、そして無用に生まれだす。

「おい、おい（と相手が言った）、それがキリスト教徒のやることなりや！ そんなら、おりゃすぐにでもセーヌに飛び込んでお陀仏してやるぞ、畜生<sup>8)</sup>！」

同様のパロディ的な口調で口火を切られた返答は、そうかと思うと紋切り型をよびおこす。

7) 文庫版 pp. 51–52。「6時10分前。風が冷たくなった。ぼくらは窓を閉め、ラールス大百科事典の『骨折およびその併発症』の項を夢中になって読み耽り、これからお聞かせすることについて資料を集めた。6時。ぼくらの親友ユベールが、11カ月前に借りていったトーチランプを返しに来て、言った。『おや、君たちとこきれいになったじゃないか』『カラスブラッシュを待ってるんだ』彼は自分も仲間に入ると言い、進んでジンを買ってくと申し出た。ぼくらは彼に礼を言った。彼は下りて行き、しばらくして上がってきたが、途中で会ったと言ってリュシアンを連れてきた」〔同書、221頁〕。

8) *Ibid.*, p. 74〔同書、238頁〕。

「まあまあ、まあまあ」と、ぼくらのなかで親分然とした男が自転車のチェーンを威嚇するようにくるくる回しながら言った。「そう興奮しないで<sup>9)</sup>」

こうした紋切り型、ならず者との出会いでは避けがたい文言、ごろつきの態度につきものの記述が、混じりあい矛盾しあい、ついには不条理にいたる（「ぼくらのなかで親分然とした」は、こうした場合ふつう言われる「相手のなかでリーダー格とみえる」を不条理に剽窃している）。問題となっているのは語調の統一性だけでない。言語の遊戯は意味内容にもあふれだし、テキスト全体が依拠する世界とは相反する小世界を出現させ、それは一気に膨らんだかと思いきや、すぐさま跡形もなく消えさる。ちぐはぐさが脅かしているのは語調の統一だけでなく、ここではもっと深く、依拠するものの統一を脅かしているのだ。この場面では、誰ひとりして自転車のチェーンを持っていて素振りを見せていたものはおらず、それは紋切り型の連鎖のはてに、脈絡なく出てきた。この奇妙な自転車チェーンは現れるやいなや消え、それがいっそう読む者を戸惑わせる。読者はたっただいま出現したものをどうすればいいかわからず、読書のいかなる約束事にも入りこむことができないのだ。

カミはメロドラマのお涙頂戴的センチメンタリズム、不幸な宿命と贖罪の愛といったものを、嬉々としてパロディにしている。しかし以下の対話——若いサクソ演奏者が音楽家にならないと知ったため、かれの両親が受けた絶望をみずから友人に語るもの——では、そうした図式だけでは説明しきれない詳細な細部がある。

たまらないサクソ吹き：絶望のあまり発狂し、父は髪を緑に染め、ほどなくして死んでしまったよ。物笑いの種になって。

腹心の友：不憫なお父上！

たまらないサクソ吹き：ショックが大きすぎた哀れな母は、二十四時

---

9) *Ibid.* [同上].

間で性別を変え、外人部隊に志願してしまった。

腹心の友：不憫なお母上<sup>10)</sup>！

ここには反復におけるモノ化がたしかに見られ、ベルクソンの分析と一致するように思われる。しかしベルクソンの定理だけでは、細部の奇妙さと無根拠さを説明するのに十分ではない（なぜ髪を染めるのか、しかもなぜ絶望して緑色に？）。ちぐはぐさはこのようにしばしば、おかしみの定石にしながらって機能しているかに見えるテキストに、密輸品のようにもぐりこんでいるのだ。

### アイデンティティの問題

笑える存在とは、ベルクソンにおいては、限定に閉じこもったままの状態である。ちぐはぐさにおいては、意味の法則が勝つように思える瞬間、その存在はあらゆる限定から逃れさる。ベルクソンのおかしみにおいて問題なのは、つねに多かれ少なかれなんらかの失墜である。ちぐはぐさにおいて、わたしたちは重力の法則から正確には逃れられず、ある物体と対峙するのだが、その重みと物質性といったら、わたしたちを狼狽させるほどである。社会的、文化的、イデオロギー的、人類学的常態のメッカで、あらかた消費されるようなものではおよそない。

もっとも普及した、もっとも普遍的に広まっているおかしみの形態は、尽きることのないふたつのテーマ、性（実際には差異としての性。他者の性、あるいは他の性的指向）および人種的、文化的、言語的な差異において演じられる。ありふれた言い方だが、他者性は笑いを生みだす。この笑いの多少なりとも攻撃的な意味、言語的侵犯を前提とした喜びについては、ここではひとまず置いておこう。笑いはこの場合むしろ、認知および習得の代替行為となっている。差異はわたしたちを、突きはなすと同時に引きつける。いかにしてみずからの身は守りながら、あの心かき乱す他者性に達するか。言語

---

10) Cami, « L'après-midi d'un saxophone ».



には、他者性をもっているふりをし、さも自分のものにしていかごとく、さまざまな変形をこうむらせる力がある。笑いは、暴食によって得られる喜びに似た言語操作から生まれうる——というのもことばと戯れることは、ものごとを口に入れることだからだ。笑いとはこのとき、わたしたちが他者の奇妙さを見定めながら、それを自身の一部とするような、興味深く耐えがたい（笑いが通常短いである理由である）状況にいることを意味する。人種差別主義者は、黒人のことを「白雪姫」と呼んで笑うだろう。この他者を、抵抗を受けつつその反対物へと変える力を見積もっているからだ。ある人物の身体的特徴を反語によって示す、あの手この手の冗談についても同じことが言える。かくして、ある特定の個人に対して笑い手の優越性を示すのを狙った、もっとも端的に底意のあるおかしみは、まったく別の次元をひらく。認知された他者性は、それを認知する者において、拒絶、排斥、そして同時に消費を引きおこす原動機となりうる。ある同じことばの行為において、わたしたちは奇妙さを口にだして発見しつつ、ことばの力を、笑う対象の人物あるいは物のアイデンティティに及ぼすことで、その奇妙さをそのじつ弱めているのだ。

なによりこの奇妙ななにかは、それ以外のなものにもなりうるようになってくる。性は差異化そのものに応じて離反と接近をくりかえし、排泄物はわたしたちをもっとも内密な親密性へと送りかえすことで、差異を均等化する。糞尿的あるいは性的な用語は、ただ発話されるだけで子どもたちの笑いを引きおこす。この笑いは、両義性の認識を意味する。つまりみずからの言語、みずからの唇で名づけられるものが自分のものでありながら、——ちょうど性や排泄において、わたしたちにもっとも親密に属しているもの、秘めたる内部が、他者のために生じ、また他者になってしまうように——わたしたちの手元をすり抜けていってしまうということだ。人種や国籍にかかわる冗談は、性や糞尿的なものと共通して、主張され問題化された、そして言語において生産され変形をとげたアイデンティティという俎上に載っている。ジャン＝マルク・ドゥファイは、笑い全般についてきわめて的を得た発言をしている。「わたしたちの笑い、それから他者の笑いというものは、わ

たしたちひとりひとりのアイデンティティがそれに基づいている合意を演出し、問題化するのだ<sup>11)</sup>。ちぐはぐなユーモアはおそらく、おかしみのあらゆる形態に見られるこの問題化の、もっとも扇情的で急進的な表現に対応するだろう。

チェスタトンには、類似・非類似による笑いにかかなり近い考えを、ロンドンにいる外国人が引きおこす揶揄について述べている。

問題なのは、ひとつの存在が、みずからに似ておりかつ似ていないという、ほとんど受け入れがたいこの真実なのだ。自分とまったく無関係のものを笑うものはいない。だれもヤシの木を笑いはしない。神の似姿が、フランス人の黒ひげをつけたり、黒人の顔をしていたり、仮装しているのを見るのが可笑しいのだ<sup>12)</sup>。

似ていることと似ていないことには、じっさい他者におかしみを感じる際のふたつのはっきり異なった条件がそろっている。矛盾と、接近の印象だ（おかしみとは人間的なものである）。チェスタトンは、人間的なさまざまな差異がもつづく共通の土台として、神に言及している。神という絶対があるからこそ、人間をそのような状態で見るのが奇妙に思えるという考えは、新しいものではない。しかしチェスタトンの指摘は、それだけにとどまらない視野を切りひらく。人間を区別する明白な差異と、そうした差異が統一のなかで溶けあうある絶対とのあいだのショックの笑いが生じることで、この個別の存在物と、全般的な存在の次元の、尺度の違いにもとづく笑いの可能性が生みだされる。なんらかの存在があるからこそ、それをそのかたちで見るのが奇妙なのである。このおかしみは、下劣も尊厳も必要とせず、神に対して余分なものとして現れるのは人間なのではなく、そこではどんなものでも余

11) Jean-Marc Defays, *Le Comique : principes, procédés, processus, Seuil*, « memo », 1996, p. 4.

12) G-K. Chesterton, *Les Enfants de Londres et leurs plaisanteries*, cité par Albert Laffay, *Anatomie de l'humour et du nonsense*, Masson, 1970, p. 58.

分になりうるのだ。ちぐはぐさは矛盾、あるいはアイデンティティの不確かさの杵を押しひろげ、ヤシの木、人間、自転車、象をとなりあわせにしている。

なお人間の領域にとどまりながら、カトリック的な視点とちぐはぐなものとの関係を、さらにおし進めることもできるだろう。神の御前では、それがそれであることになんらかのスキャンダルがあり、それがそれでないことになんらかのスキャンダルがある。カトリックであったチェスタトン、このスキャンダルを「おかしみ」と表現している。同じくカトリックであったキルケゴールは、そこに罪そのものを見る。「罪とは、人間が神の前に絶望して自己自身であろうと欲しないこと、ないしは絶望して自己自身であろうと欲することである<sup>13)</sup>」。ちぐはぐさの機能とは、カトリック的な視点では、この世界において（そして必然的におかしみの様態において、なぜならわたしたちがいるのはこの世なのだから）、同時に存在した存在しないことのひとつの方法を表明することであると言えるかもしれない。あるいはより正確には、それがそれであるだけにいっそうそれでなくなること、キリスト教の形而上学的スキャンダルに唯一答える不条理な存在論である。この奇妙な存在論は、なぜ「ちぐはぐな作家」といえる者の多くが、あらゆる種類の進化論と無関係か、あるいは自身の伝統的な立場を表明しているかの説明となるかもしれない。ノディエ、ヴィアラット、チェスタトン、ダリ、デブロージュ〔20世紀フランスのユモリスト〕、イヨネスコといった作家たちである。ちぐはぐさの存在論においては、進化の可能性はない。なぜならそこには、ヘーゲル的な意味での弁証法がないからだ。しかしあまり高望みはしないでおこう。本章はあくまで、おかしみの理論的また歴史的の問題に焦点をあてたものなのだから。

チェスタトンのいうおかしみは、ボードレーが、絶対的おかしみ、あるいはグロテスクなおかしみを、ある価値や個人に向けられたのではない、それ自体のおかしみであると定義するやり方に対応しているように見える。

13) Sören Kierkegaard, *Traité du désespoir* [1849], Gallimard, « Folio », 1988, p. 191 [斎藤信治訳『死に至る病』、岩波文庫、2010年、195頁]。

「この場合〔有意義のおかしみの対立物としてのグロテスクなもの〕には、笑いは、人間の人間に対する優越の観念の表現ではなく、人間の自然に対する優越の観念の表現である<sup>14)</sup>」。しかしボードレールは、なんらかの優越性の表現という考え以上には進まない。グロテスクなものは、ガブリエル・ド・ロートレックのテキストでも、ペレックのテキストでも、いかなる優越性も含んでいない。象の特性や言語的変奏の無根拠さが、制御不能のある事物によって引きおこされた笑いを解放している。その事物はどこまでも逃れつづけ、どんなかたちもとることができるように見え、つまり完全な不確定さのなかにいる。

またこのことはさしあたり、ちぐはぐさを、ブルトンがヘーゲルにつづいて客観的ユーモアと呼んだものに近づけるかもしれない。つまりユモリストと、かれ自身の関係をしめす伝統的な、主観的な意味でのユーモアに対して、主体にも世界にもかかわるユーモアのことだ。このユーモアは精神への抵抗を見いだす。バルクソンのな、機能的な、正確な意味を明らかにする単なるモノ化ではなく、言語活動において意味のただ中で、もっとも親密に属していながら逃れさってしまうものの表明のことである。

アルベール・ラファイが、ナンセンスをユーモアに関連づけてこう言うとおりだ。「ナンセンスとは、言語活動それ自体に応用されたユーモアとは言えないだろうか。それは、単語や言い回しのなかであくまでなにかであるもの——溶けえないもの、しぶといもの、精神の反対ですらあるもの——を明らかにする効果をもつのではないだろうか<sup>15)</sup>」。問題はこのしぶとい物質をそれ自体、そしていたるところに見ることである。これこそボードレールの優越性を排した、客観的ユーモアと絶対的おかしみの総合にほかならず、ちぐはぐさと呼べるものだろう。すべてが余分に見えるとき、ちぐはぐさは

14) Charles Baudelaire, « De l'essence du rire » [1855], *Curiosités esthétiques, L'Art romantique*, éd. Henri Lemaître, Garnier, 1962, p. 254 [阿部良雄訳「笑いの本質について、および一般に造形芸術における滑稽について」『ボードレール批評Ⅰ』所収、ちくま学芸文庫、1999年、232頁]。

15) Albert Laffay, *op. cit.*, p. 142.

なにごとかを言おうとしており、そのなにごとかからは意味ではなく、必要性がはぎとられている。それは還元できないもの、消化不能のもの、出現にひとしい。なんらかの禁止の踏みこえということではいささかもなく（というのなにが禁止されているかを知っていれば、禁止されたものの断絶はそれ自体としてつよく感じられ、論理的な秩序にくみ込まれるからだ）、ただ余分なことは、なににもならない語がある。

ちぐはぐさは、たんにおかしみの一種というだけではおそらくない。おかしみとしては、それは両義的なものであることをすでに確認した。ダニエル・グロジュノウスキとベルナル・サラザンによれば、現代的な笑いを特徴づけるのは、その決定できない性格にあるという。この決定できない性格は、それでもおかしみの、とりわけひねくれた、なんらかの意図を前提とする。たとえ作者の両義性が、言っていることを認めつつ認めないようなものであったり、真面目とも不真面目とも決めがたいようなやり方で表現されたりしていてもである。またおかしみという語は、おそらくややせまい。『うたかたの日々』の冒頭でコランのニキビが、自身の醜さを見て肌の下にひっこむとき、ちぐはぐさということは言えるが、おかしみについてはおそらく言えない。ちぐはぐさはおかしみよりもより広いグラデーション——奇異なものからまぎれもない悪ふざけにまでいたるような——を示している。ピエール・ダックやベンチリーのテキストは爆笑を誘うが、デュヴィヤール〔20世紀フランスの作家、戯曲家〕、ペレ、マンディアルグのある種のでまかせは、より控えめな（だからといって意味がより明確なわけではない）反応を呼びおこす。わたしたちは驚くか、戸惑うしかない。しかしこうした印象は、一般には冗談に近いニュアンスを帯びる。

### ちぐはぐさと礼儀作法

なぜほかの語ではなく、「incongru」と言うか。「farfelu 風変りな」がリトレ辞典でまだ言及されていなかったとき、1865年にロベール辞典がこの語を「espiègle いたずらな」の意味で掲載している。リトレでは、この意味では「fafelu」しか載っていない。ロベール辞典は相当する語として「bi-

zarre 変な」「cocasse 珍妙な」「un peu fou やや頭のおかしい」を挙げている。しかし「farfelu」はつねに正気でないこと、存在のあり方（un individu farfelu おかしな奴）を含意する側面がある。また「incongru」には、いわば物質的なニュアンスもある。「farfelu」が示すのはむしろ空気のように軽く、流動的な空想癖で、マルローの『紙の月』や『ラッパの鼻をした偶像のための書』での文体によく当てはまるだろう（逆説的だが『風狂王国 Royaume-Farfelu』の文体にではない）。ちぐはぐさははっきりと、具体性のなかに位置を占めている。「saugrenu 突飛な」は「incongru」により近いが、ニュアンスは異なるように思われる。「saugrenu」と呼べるものは、おそらく内在的に「saugrenu」なのだ。「incongru」は予期せず出現する。「loufoque へんてこな」はかなりいい線を行っているように見えるが、その語調はやや時代がかっており、シャ・ノワールやアルフォンス・アレーに結びつきがちだ。さらに言えば、それは特定のレトリックの効果というよりも、あるふるまい、ある美学を指しやすい。

「incongru」は、ラテン語の動詞「congruo」に由来する語「congruus」の否定にあたる。「congruo」はなんらかの出会い、とりわけ一致を指す。この動詞の意味を、その否定形の定義のひとつに再び見いだせる。「incongru」とは一致なき出会い、耐えがたい重なりを指しうる。「congruus」はふつう、「conforme 一致した」、「convenable 適当な」という意味である。「incongru」はときに、慣例や礼儀作法に反したふるまいを指すことがある。この意味では、ごくシンプルに「inconvenant 無作法な」の意に近づく。「incongru」とは「なされないこと」だ。この語はよく、おならやその他の排泄行為を指すときに使われる。『大地』でゾラは、イエス＝キリスト〔作中人物イヤサントの異名。怠惰な大酒飲み〕の腸に関する偉業を三言で要約している。「il fut incongru かれははしたなかった<sup>16)</sup>」。『現代官能辞典』初版の序文で、アルフレッド・デルヴォーは、サロンで「はしたない文学」と見

16) Emile Zola, *La Terre*, Charpentier, 1887, p. 352 [小田光雄訳『大地』、ルーゴン＝マッカール叢書 第15巻、論創社、2005年、419頁を参照しつつ、論旨にあうよう改訳した]。

なされていた『レ・ミゼラブル』のくそつたれに関する反応について書いている<sup>17)</sup>。カンブロンヌ〔フランス第一帝政期の軍人。ワーテルローの戦いで投降を求めてきたイギリス軍将軍に「くそたつれ！」と返答したとされる〕の一言はその意味で、文学儀礼にも礼儀それ自体にも反するものだ。同様に、『糞尿辞典』は、戯曲『くそつたれ商人』（1756）を次のようなことばで要約している。「レアンドルはギルを目の敵にしている。なぜならジルは、毎朝かれの家の敷居に、大きな粗相 *grosse incongruité* をしに来るからだ<sup>18)</sup>」。

糞尿的な領域、とにかく身体、とりわけ「下」の機能にうったえるあらゆるものは、したがってちぐはぐさから排除されないし、そのことを詳しく掘りさげることがあるだろう。まずは単純にこう問うてみよう。冗談の永遠のテーマである、糞尿的なものに含まれる断絶の意義とは、たんに禁止の侵犯、矛盾、転覆——上対下、肉体対精神、カーニバルでめちゃくちゃになった宗教儀式で、口で神をたたえるかわりに尻から息をだすように——に帰せるものだろうか。この意味では、カーニバルの糞尿的なちぐはぐさは、わたしたちのちぐはぐさの定義からたぶんすり抜けてしまう。転覆は、クロード・ゲニューベの言うように、別の秩序、別の論理、さもなければ別のかたちの宗教を設けてしまうからだ<sup>19)</sup>。

しかし糞尿的なものはまた、糞便において不定形なものを、放屁において空虚を、おそらく表明している。それはある秩序との断絶においてだけでなく、なにも意味せず、なにもすることがない時々にも、そのなにもなさについてあまりにも騒々しく、においをまき散らしながら、あまりにも物質らしく生じるのだ。糞尿的ユーモアのなかに、必要性の世界ではなにも役に立たないもの、生みでる理由のないもの、純粋な消費によって引きおこされた、笑いのこだまをまだときおり聞くことができる。糞尿的なものを、周辺的な

17) Alfred Delvau, *Dictionnaire érotique moderne* [1864], UGE, « 10/18 », 1997, p. 12.

18) [Jannet, Payen et Veinant], *Bibliotheca scatologica* [1849], Contre-moule, 1992, p. 24.

19) Voir Claude Gaignebet, *Le Carnaval*, Payot, 1974.

位置しか与えないとはいえ、ちぐはぐさからきり離せないのはそうしたわけだ。これはまた、別の問いを立てさせてくれる。一体ななが、ちぐはぐさについて与えることのできる形式上の定義——というの、ちぐはぐさは抵抗や事物の重みにおいて働くという形式主義が一応あるからだ——と、それにこびりついてくる物質の存在、世界の実質的なかたまりの存在を結びつけているのだろう。

ちぐはぐなものとはつまり、ある秩序、ある習慣に反して生じるものではあるが、「そこではなにもすることはなく」、的外れにみずからを表明し、なにもものをも問題化しない。わたしたちはいつも、恐れているもの、あるいは禁止しているものの闖入を期待する。ちぐはぐなものはあらゆる期待に反して生じる。だからわたしたちは、ちぐはぐさを見逃がすときがある。なぜならわたしたちは、知覚することを準備しているもの、与えられた図式に入っているものしか、よくよく感じとれないからだ。その結果、二重の意味で、ちぐはぐなものの無意味さが現れてくることがある。それは意味をなさず、また重要性も持ちあわせていないのだ。なにがおもしろいのかはわからない。ここに生じているものを、どうしたらいいのか。なすすべはなにもない。どこから来たのか、なにに宛てているのかもわからない。ただそれが生じるままにまかせるほかは。

### ちぐはぐなものの経済

ちぐはぐなものが量的な意味で「congru」ではないものに相当するという考えに、ようやくたどり着いた。「portion congrue」とは、ちょうどいい量を指す（それゆえ時代がくだって十分ではない、あまりにもちょうどよすぎるを意味するようになった）。ちぐはぐなものは、折り目ただししい交換、まっとうな価格や報酬、満足のいく分け前があるようなタイプの経済にはそぐわない。ちぐはぐなものから生じる余分は、いかなる贅沢も、快適さもたらさず、交渉不能で、なんの価値もない。この過剰はまた、カリカチュアが生みだす誇張ともなんら関係がない。カリカチュアの過剰である誇張法は、不要物を出すのではなく、むしろ意味あるものを膨らませる。すべては、カ



リカチュアの対象の生成過程に吸収されてゆく。

『機知—その無意識との関係』でのなかでフロイトは、消費という観点で、おかしみの効果の理論をうちたてている。「われわれが笑うのは、過度の消費に対してである<sup>20)</sup>」。つまりいわゆる滑稽について言えば、たとえばある動作の見かけ上の必要性和、その必要性をいちじるしく逸する不器用で大きな身ぶりとのあいだの、隔たりのことである。観察者によるエネルギーの最小限の消費との比較が、余剰を解放し、差分が笑いとなって費やされる。わたしたちは笑う、なぜなら（機知についていえば）抑圧、（滑稽については）表象、（ユーモアについては）情動の起こりえた消費に対して、心的に節約が行われるからだ。機知は、攻撃的また猥褻な衝動を抑圧するために用いられた、エネルギーの一部分を解放する。滑稽は、滑稽な人物による肉体の消費と、笑い手による最小限の消費の差分を見積もる。ユーモアでは、人は自分自身を笑い、そのことで自己憐憫の費用を払うことを避けられる。いずれにおいてもわたしたちは、子ども時代との比較で生じた心的作業の余分を、笑いへと転じる。子ども時代にこうした作業がほとんどないのは、精神がまだ、のちにわたしたちをさいなむことになるあらゆる制約を、欲動の抑圧においても、意味の構築においても、十分に行使していないからだ（機知における「ナンセンス」の使用は、したがって批判精神がまだプシケに対して影響力をもっていなかった段階へと立ちもどらせる）。フロイトは、笑いとは「心の発達を通じて本来ならひとまず失われてしまう快を、まさしくその活動から取り戻す<sup>21)</sup>」ことを狙ったものだとして結論づける。この理論によれば心的節約は、とりわけ機知の場合、言語の節約によって容易となりうる。機知の技法は、大部分が、縮合、短縮、激突、暗示にもとづいている。

発話というものが原則として、規則正しい経済に従わなければならないとすれば、ことばを湯水のように使うちぐはぐさは、なるほど笑いを噴出させ

20) Sigmund Freud, *Le Mot d'esprit et sa relation avec l'inconscient*, trad. Denis Messier, Gallimard, « Folio », 1988, p. 337 [中岡成文・太寿堂真・多賀健太郎訳『フロイト全集 8—1905年：機知』、岩波書店、2008年、225頁]。

21) *Ibid.*, p. 411 [同書、285頁]。

る、幼児的で遊戯的な消費を行っている。しかしそれは、フロイトが与えた意味での消費を指すだろうか。ちぐはぐさによる消費を、フロイトの言う滑稽に近づけることはできる。すなわち、身体的（幼児的）備給の過剰によって笑われる事物ないし存在と、それよりも心理的にも肉体的にも有利なバランスがあることをみずからに見いだし、優位性を確認する観客とのあいだの隔たりのことだ。しかしフロイトの定義は、下品な笑劇から性格喜劇、カリカチュアにいたるまで、あらゆる種類のおかしみにあてはまる。加えてちぐはぐさによる消費は、正確さや定義といったものをむしろ浪費する。ちぐはぐさが肉体的なものに固執しがちなのは、それが細部を消費するからだ。つまりそこで肉体的なテーマは、低俗なものレトリックというよりは、経済的な不均衡の結果だといったほうがふさわしい。ちぐはぐさは機知とは逆に働き、わずかなことばでも、つねに言い過ぎる。ロートレックのテキストで、象の毛髪麻痺がわたしたちに節約させているのは、ふつうは切りつめて大切に使われるもの、すなわち意味の制約でないとしたら、なんだというのだろうか。ようやく、無根拠なもの出番である！ ことばの消費はものごとを、それらになにも言わせないという本質的な自由を、わたしたちにゆだねる。笑いは暴食を許可するがなされることはなく、そこにはただ一見食べられそうだけれども、言語による意味の調理法では溶けえない事物が現れる。ちぐはぐさが交わるのはまさにその点、フロイトのいうナンセンスによる幼児的快であって、節約され縮合された機知の表象にはではない。

まとめると、「incongru」という語は、基本的にはつぎの三つの語義に対応するだろう。断絶、奇異な出会い、余分、そしてそれらは場合によっては居心地の悪さをとまなう。断絶と、無意味な消費あるいは価値のない余剰という概念には、密接なつながりがある。それはそれ以外のものとは関係を結ばず、そこではあらゆる機能、つまりあらゆる経済的価値を失う。それはいかなる論理的、テキスト的仕掛けの生産力をもってしても、収益をもたらしえない。同様に、奇異なものがある秩序に断絶をうちたて、くみ込むことのできない不調和なものをもたらす。